

本と社会

「人文ネットワーク」ニューズレター
2002年5月10日創刊号

●発行元 人文ネットワーク
●印刷 (株)新栄堂 ●編集制作 (株)新評論編集部
●事務局 (株)新評論編集部内(担当:吉住)
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-16-28
Tel. 03-3202-7391 Fax. 03-3202-5832
E-mail: shm@eagle.ocn.ne.jp

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実を考え、その現実を改革しようという会です。私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセス、本づくりの現場に注目しながら——つまり我が国の出版の社会的現実における個々の人文書の具体的生産現場と切り離すことなく——一冊の人文書を読解します。要するに、人文書の内容の読解と、その社会的な現実存在の理解を結びつけようというわけです。おそらく前者は著訳者の、そして後者は編集者の役割でしょう。両者の出会いから、新たな現実的知性は発見されるのではないのでしょうか。このニューズレターは、それをめざして発刊されます。

本づくりの改革へ

●「有効情報迅速広範伝播社会」

現代社会は、情報化社会です。「情報化社会」とは、有効な情報がすばやく広範な人びとに伝播する社会のことですから、厳密には「有効情報迅速広範伝播社会」と言えるでしょう。ポイントは、そこで流れる情報の有効性・迅速性・広範性にあります。

問題は、その三つの質です。実際には、それらは、たんなる利便性・拙速性・大衆性に堕していないでしょうか。情報洪水のせいで受け手の側の情報許容能力がパンク寸前になり、受け手は自分の目の前の利害・興味に直接関わるもののみを選別し、あとは聞き流すことになって、送り手の側も多数の受け手が求める情報を選別的に流すという悪循環が生まれ、条件反射的(感覚的とりわけ視覚的)に精度が確認できるような「有効性」を持った情報のみが限定的に流される、ということになっていないでしょうか。

要するに、大衆性は有効性を限定し、ほんとうの問題解決への「質的な最短距離」とでも言うべきものの発見を困難にしているのではないのか。

●「質的な最短距離」の発見へ向け

人文ネットワークは、読者・著訳者・編集者、さらにできれば書店・印刷所の方々とも連携して、我が国の人文書出版の現実を考え、その現実を改革しようという会です。

そのために私たちは、まず人文書出版の現実についての、ほんとうに有効な情報を、このネットワークを通じて広い範囲で共有していきたい。そしてそこから、リアルで強力な「問い」を練り上げネット上にのせることをめざします。

このような問いは、思索＝行動の現実的なプロセスを始動させるはずで、「要するに結論・結果は何なのか」という受け手の性急な問いに解答を与えることを任務とする既成メディアは、受け手の思索プロセスを奪い、結局は「量的な最短距離」としての拙速性を実現するのに対し、私たちは受け手に思索を要求することによって、ほんとうの問題解決への「質的な最短距離」を発見したいと思います。

●人文ネットワークとは

私たちは、人文書が構想され制作され流通する現実のプロセスの全体を視野に収めつつ、特に制作プロセスに注目します。大学改革が、カリキュラム・組織・校地校舎などの総合的な改革でなければならないように、人文書出版改革も、編集企画・著作翻訳・印刷製本・営業販売等すべてに及ぶ、総合的なものにならなければなりません。しかし、大学改革にも「授業改革」という核があるように、出版改革にも核となる部分が存在します。それが広い意味での制作、要するに本づくりの改革です。出版界は、この本づくりという核の主要部分を、著訳者という外部に決定的に依存している点で、授業という核の主要部分となる教員を内部にかかえている大学と、本質的に異なります。人文ネットワークとは、本づくりのためにではなく、本づくりを考え改革するために、まずは著訳者と編集者が会える場なのです。



★ ★ ★ 『情報エネルギー化社会』カバー

本誌では、毎号具体的な本を取り上げることにより、私たちの活動をご紹介します。第1回目はP.ヴィリリオ著『情報エネルギー化社会』です。(桑田禮彰)

●『情報エネルギー化社会—現実空間の解体と速度が作り出す空間』ポール・ヴィリリオ／土屋進訳、新評論。ポスト工業化社会に立ち現れた仮想現実空間の実相を解明する。2520円

●著者主要邦訳文献

『速度と政治—地政学から時政学へ』(市田良彦訳、平凡社、1260円)、『幻滅への戦略—グローバル情報支配と警察化する戦争』(河村一郎訳、青土社、1680円)、『情報化爆弾』(丸岡高弘訳、産業図書、2205円)、『戦争と映画—知覚の兵站術』(石井直志・千葉文夫訳、平凡社、1365円)、『電脳世界—最悪のシナリオへの対応』(本間邦雄訳、産業図書、1890円) ※税込価

P.ヴィリリオの世界と『情報エネルギー化社会』

本書について

●土屋 進 (本書翻訳者)

本書『情報エネルギー化社会—現実空間の解体と速度が作り出す空間』(2002)の原題は「動力の技術 *L'Art du moteur*」(1993)。

車や飛行機などの動力技術は人間や事物を物理移動させる技術だった。しかし現代社会に大きな転換をもたらしている情報技術は、人間や事物を物理移動させる代わりに情報を移動させる。移動を支配していた「内燃エンジン」や「外燃エンジン」は、徐々にその支配的な地位を「情報エンジン」に譲りつつあるのだ。

本書で展開されるのは、こうして作り上げられた「情報エンジン化社会」の実相であり、それに至る歴史であり、それが人間社会に波及していくプロセスである。本書によって読者は、「情報エンジン化社会」の基底に横たわる世界、すなわち「光の速度」(リアル・タイム)が作り出す「仮想現実」が、どのように「現実化」し、どのように古典物理的な「時空」世界を解体し、どのような変容を人間「存在」にもたらすのかを知ることができる。

本書の魅力は、グローバル化やメディア社会の本質を明らかにしている点である。本書を「いたずらに危機を煽っている本」とみる読者もあるかもしれない。しかし新しい技術は、実際に多くの人々の仕事や生活を極めて短期間のうちに一変させてしまう。旧来の新技術は、特権を持つ人から社会全体へと長い時間をかけて普及していった。しかし情報に関わる新技術は、社会全体を無差別に巻き込み、普通の人々の生活感覚やリズムを一挙に解体してしまう。

メディア化やグローバル化に危機感を抱かない人々は、実際には社会



ポール・ヴィリリオ

著者プロフィール

●Paul Virilio

1932年パリ生まれ。「空間思想家」。建築家、都市設計家としての斬新な空間設計によってフランス建築批評大賞を受賞。建築大学学長を務める。空間技術の専門家であると同時に、「空間」の変遷を「速度」という視点から考える先端思想家でもある。一連の書物の中で、速度技術が社会をどのように構成していくのかを広い経験と知識に基づいて展開している。ジャーナリズムの世界でも、様々な雑誌の編集や執筆に活躍している。

の中で既得権を持ち、特権的な地位を享受している人たちだ。そして、この新しい技術によって真っ先に影響を被るのは、熟練植字工さんや町工場の人々のように、等身大の手の技術によって生きてきた人々なのだ。すでに社会のコモン・キャリアが鉄道から通信へと大きく変化をしている現在、新しい技術と社会の本質を伝える本が必要ではないか。

*

*

*

ヴィリリオの『動かない乗り物 *L'Inertie Polaire*』(1990)という邦訳近刊書(2002年秋、新評論刊)では、仮想空間が実体化する物理世界に迫り、速度が作り出す新しい空間の物理的根拠が明らかにされる。

書評

逆ユートピアからの脱出口を求めて

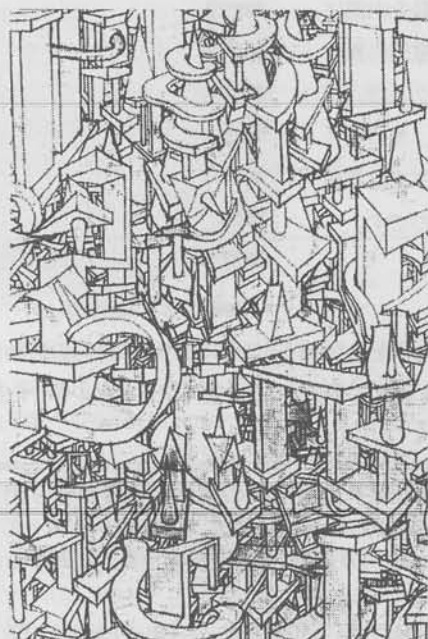
●大野英士(早稲田大学他、教員/文学)

「速度」の思想家ポール・ヴィリリオへの関心が再び高まってきている。その背景には、無論90年代から相次ぐ国際紛争がある。湾岸戦争、コンボ紛争、そして昨年の同時多発テロ。いずれもヴィリリオが初期の代表作『速度と時間』以来、「時政学」的文脈でその危険を予告していた「全般的事故」としてのサイバー戦争、サイバー・テロの構図にそっくり納まっているとはいえないか。そんな中で、彼が1993年に書いた『情報エネルギー化社会』の邦訳が出た。

ヴィリリオのいう「速度」は一般にこの言葉のもつ肯定的イメージとは裏腹に、政治交渉に必要な「空間」を消滅させる権力的企図と密接な関係にある。同様に、軍の兵站技術に起源をもつというメディアは、人間から「直接性」を奪い、少数の特権的なグループによる支配を可能にする全体主義的な装置なのだ。しかも現代、最新のテクノロジーを駆使するメディアは、電磁波速度という「絶対速度」を手に入れ、テレビや情報端末の小さな画面を通じてリアルタイムで情報を一方的に配信する「統合擬似現実世界」を実現した。ヴィリリオはこうしたメディアの全体主義の論理と帰結を犀利な分析で明らかにする。

ゲット化した都市でこうしたヴァーチャルな現実にとらえられる大衆は、本来的な意味でのコミュニケーションを奪われ、ますます孤立していく。一方、メディアを一手に握る権力は、メディアのもつ衝撃的な解放力や、今や地球上のすみずみにまで張りめぐらされた監視網を、彼らの巧妙な支配の道具として利用していく。メディア化の行きつく先には、全地球規模での環境コントロールや、優生学的な人間身体内部の植民地化等の悪夢が待ち受けているのだ。

しかし、この書物の面白さは、一種の過渡性が刻印されていることだろう。二大超大国の抑止体制が崩れた後、ヴィリリオは目前の状況と歴史の間を軽やかに行き来しつつ、「速度」という自己的方法的仮説の有効性を確かめていく。なるほど、訳者の指摘どおり、ヴィリリオは世界そのものを汚染し、現実を抹消するサイバー空間からどのようにして抜けだしたらよいのか、具体的な処方策を示しているわけではない。しかし、この逆ユートピアとしてのメディア論は、現代の薄気味の悪い擬似空間の中で、倫理的主体の生きる場をいかに確保するかという著者の強い危機意識に支えられていることもまた確かだ。達意の訳文が心地よい。



海野貴彦作、無題、『情報エネルギー化社会』
カバー・表紙装画、部分。

座談会／『情報エネルギー化社会』を読む

2002年3月8日、早稲田大学人総研分室で、訳者の土屋進を囲み活発な議論が行われた。本誌執筆者の桑田禮彰・大野英士・出口雅敏・白石嘉治が参会。議論は多岐にわたったが、とりわけ情報化社会における政治と倫理、あるいは「新たな速度への乗り方」(桑田)があらためて問われた。以下、各自の発言の要旨を記す。

◆冷戦後の新たな所与を受けて

大野 原著は1993年に出版されています。ヴィリリオは冷戦終結後、「抑止」の喪失という新たな事態を受け、メディアに対するコントロールを失った世界が迫る論理的な帰結を描き出しているといえます。

ヴィリリオの立場は初期の『速度と政治』(1977)から一貫しています。ただ、『情報エネルギー化社会』では、主として書かれた時期のしからしめと思われる、ある種の揺らぎが認められます。優生学や都市の暴動に対する両義的な態度もその一端です。

とはいえ、彼の強烈な危機意識の背後に、ある倫理的な態度決定があることを見逃すべきではないでしょう。権力は高速化した情報を支配し、政治的な交渉の可能性を捨象します。メディアは敵を情報に還元し、その消去を執拗に指図する。彼は全世界の情報汚染という状況を前に、皮膚感覚に由来するかのよう激しい拒否の身振りを発しているのです。

◆民主制とその危機

桑田 ウォルター・リップマンはすでに『世論』(1922)で、民主制における閉鎖性の問題を、情報の問題として指摘していました。ヴィリリオ自身、古代ギリシア都市について同様の問題についてふれています。彼が本書でいう民主制の危機は、それ自体は少しも新しい問題ではありません。

また「メディア化」という本書における重要な概念にも、歴史的には属領化という意味があります。この二重性も、情報の伝播と権力の間接支配との古くからの繋累を窺わせるものでしょう。

一般にヴィリリオの議論は、大袈裟すぎる印象があります。たとえば情報が高速度で移動しても、身体も同様の速度で移動するわけではない。だがヴィリリオは、しばしば情報と身体の移動を同一視します。それは実際には社会的な趨勢でしかないものを、あたかも全面的に実現されたものであるかのように語る彼の論調とつながります。その意味で、本書は危機を煽りすぎている感もありますが、

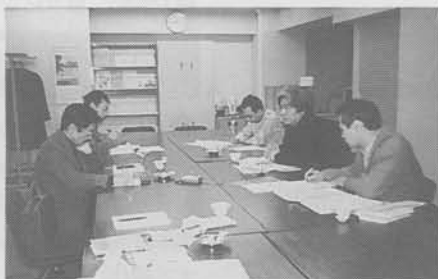
われわれに新たな速度への乗り方の模索を提起しているともいえるでしょう。

訳文は、原文の徹底した咀嚼をめざしており、「原文への忠実さ」という点で、多くの問題を投げかけています。

◆国家の問題

白石 ヴィリリオは、80年代には、国家と戦争の関係に焦点を当て新鮮でした。だが本書には既視感がある。

彼の語る情報化社会は、市場が支配する現状とあまりに癒着しています。とはいえ、過度の情報化は、むしろ身体の問題を浮上させます。同様に、資本の猖獗は、国家を喫緊の問題とするはずで、本書は、難局の所在を、逆説的に照射するかのようです。



座談会の模様

◆「地政学的」実践

出口 フランスでは、かつて辺境化に苦しんだ山村社会が、「自然公園」として新たに自己

想定を試み、都市や都市民に対抗する形で現実空間を解体し、これを象徴的に再編してゆく「地政学的」実践も生れています。ヴィリリオが語る空間変質の論理に積極的に飛び乗ることで、生きるスペースを拓く事例です。

◆ヴィリリオの世界

土屋 ヴィリリオへの興味は、アルトの言葉を捉えるために、実体を離れた思考を求めていたことに由来します。

ヴィリリオの世界は、マッハの感覚論と通じています。ニュートン力学は現象を絶対的な空間に位置付けるのに対し、マッハにとっては、現象はある種のインタフェイスです。そこでは、世界はイメージであり、車窓の風景と同様に、相対的な速度によって伸縮する。ヴィリリオの速度概念は、こうした関係論的な認識を前提しています。

ヴィリリオにとっても、冷戦の終焉は大きな分水嶺です。でも冷戦の末期には、コンピュータの情報処理速度と人間の判断力のあいだに、すでに彌縫しえない不均衡が生じていました。冷戦構造はメディアの力によって崩壊したのです。それはメディアが支配的な権力となることを意味します。たしかに本書では明確な処方示されていません。情報化社会に即した対抗的な振舞いの生成は、われわれ自身の倫理的な課題なのです。

(編集／白石)

書店からの声

●リプロ池袋館 松下康子

メディアと権力が政治や社会に及ぼす影響力、これが「9・11」以後いかに大きなものかを見せつけられている中、メディアスタディーズの売行が比較的好調である。特にマクルーハンの『メディア論』(みすず書房)、ベンヤミン『複製技術時代の芸術』(晶文社)、マーク・ポスター『情報様式論』(岩波現代文庫)、ドレイファス『インターネット

について』(産業図書)等の本格的論考が定番で動く。ヴィリリオについてもこうした流れの中にあるようで『情報エネルギー化社会』をはじめ『幻滅への戦略』『速度と政治』等がよく売れている。

私見だが、これはここ半年、E. サイードの本が非常に売れていることと繋がっている。膨大な「9・11」関連書の中で「選択と集中」が起きている。混迷を深める現代社会の諸相を読み解くために広い視野を提供する「骨太」の思想があらためて必要とされているのではないだろうか。

★ミニ・フェア情報(「ヴィリリオの世界」と社会) 常設 リプロ池袋館 人文書コーナー★
[主要出品リスト] ▶レジス・ドブレ/西垣通監修・嶋崎正樹訳『メディアロジー宣言』(NTT出版、2940円) ▶メルロ・ポンティ/中島盛夫訳『知覚の現象学』(法政大学出版局、7140円) ▶フリードリヒ・キットラー/石光泰夫・石光輝子訳『グラモフォン・フィルム・タイプライター』(筑摩書房、6090円) ▶カナダオンタリオ州教育省編/FCT(市民のテレビの会)訳『メディア・リテラシー・マスメディアを読み解く』(リベラ出版、3507円) ▶W. テレンス・ゴードン/宮澤淳一訳『マクルーハン』(ちくま学芸文庫、1050円) ▶P. ブルデュー監修/櫻本陽一訳・解説『メディア批判』(藤原書店、1890円) ▶J. フィスク/伊藤守ほか訳『テレビジョンカルチャー—ポピュラー文化の政治学』(梓出版社、4200円) ※税込価



関連書が並ぶリプロ池袋館

本と社会をつなぐ視座

『情報エネルギー化社会』
をめぐって

9・11以降の世界とメディア

●土屋 進(中央大学他、教員/現代思想)

ヴィリリオが語るように、「地球は一つのスクリーンとなった」ことを明らかにしたのは、9月11日の事件だった。

アメリカはスパイ衛星を使い、10センチ角の精度で監視できる「エシユロン」という情報網を組織し、全世界をスクリーン化している。「現実」が、たった17インチのスクリーンの中に収められているのだ。このように圧倒的な情報力を持つアメリカが、メディアの特性である双方向性という壁に突き当たった。世界貿易センターの映像はリアル・タイムで世界に中継され、全世界の人々は「スクリーン」に映し出された「現実」を共有した。一方、カタールの衛星放送局アルジャズィーラはアメリカが報道管制を敷くなか、ビン・ラディンのメッセージを報道し、アメリカに敵対する側の論理を世界に伝えた。それは圧倒的な情報力と資金力を持つ者がメディアを支配できるという幻想を見事に打ち破った。改めて「イメージの戦争」の特殊性に気がついた人々は、今、情報の収集だけではなく、情報管理を始めている。

ヴィリリオとヴォーバン

●白石嘉治(上智大学他、教員/文学)

ヴィリリオにとって、おそらくヴォーバンは重要な存在である。ヴォーバンは17世紀フランスの軍人・建築家であり、当時の絶対王権下で、軍事技術の刷新に貢献したことで知られている。ヴィリリオも建築家であり、現代の軍事技術の革新について語り続ける。

類縁は経歴だけにとどまらない。フランスの国境をほぼ画定したのはヴォーバンであるが、彼は曖昧な国境地帯に国境線を引き、線に取り囲まれた空間としての国家を創出する。その同質的な空間のなかでは、人間はいわば厚みのない「情報」であり、ヴィリリオが強調する「総動員・人間の動産化」も可能になる。じっさい、ヴォーバンは国勢調査に尽力し、動員可能な総体としての国民を見出す。しかも彼が国境線を画定した地域は、その精密な模型が作られ国家機密として保管されていた。今日、博物館でその模型の残骸を目にする者は、ヴィリリオとともに、近代国家が「情報化」ないし「全体を縮小する幻想技術」と不可分であることに思いを巡らすだろう。

メディアと倫理

●桑田禮彰(駒澤大学教員/哲学)

ヴィリリオのキーワード、「メディア化」(médiatisation)は、「メディアによる伝播」ばかりではなく、「間接支配化」たとえば「陪臣化」(=「又家来化」)をも意味する。

そもそも「メディア」とは「媒介」のことであって、たとえば大名の直臣は、将軍に対しては大名を媒介にして陪臣となる。近代政治において、国家と個人を媒介するのは、議会であり言論である。

しかるに「政治」と「倫理」は、アリストテレス以来、不可分のものとして論じられてきた。国家の統治という政治的ベクトルと、個人の自律という倫理的ベクトルは、まさに媒介としての「メディア」において交差する。

だから、現代のマス・メディアについても、その政治的な権力支配が告発されると同時に、その倫理的な言論の自由が擁護されるという事態も生じる。

問題は、現代のマス・メディアがあいかわらず「言論の自由」を楯に取りつつ、その倫理的魂たる自律を失ない、バランスを崩して、政治的権力支配に取り込まれている点である。

「距離」と人類学

●出口雅敏(モンペリエ第3大学博士課程/文化人類学)

「遠く」には、別の暮らしがある。人類学者はそれを信じ「距離」によって仕事をしてきた。だが今日、ジャンボ旅客機や電子メディアは惑星をますますくろみ、地球の裏側の人々とさえ僕らは空間や時間を共有する時代に暮らしていて、人類学者は「距離」を見失っている。

一方、ヴィリリオの視点に立てば、人類学から「距離」を奪うこのテクノロジーの加速効果が、逆説的にもかつて人類学に「距離」を獲得させたのであり、問われるべきは、速度体制の内部で成立してきた人類学的思考だ。速度体制は、「遠く」の彼らとの「距離」を縮小させ同一の空間や時間を享受させると同時に、不平等な関係、選別や分断の論理も一気に貫徹させる速度の政治だ。人類学はそれを批判的に問題化し、この速度体制に潜む「距離」を見抜く作業が課されている。なぜなら、文化的抵抗から地図上に「距離」が新たに引き直される事態や、また彼らと「近く」に暮らしていても見えない「距離」が引かれ、「遠く」互いに分断される事態にも僕らは直面しているからだ。

状況雑感

ひがみ虫

●蔵持不三也

(早稲田大学教員/民族学)

どうにも我慢がならない、というほどではないが、このところ、いや、かねてよりあまりにもいい加減な本の出し方に腹立っている。ゴースト・ライターを使いながら、「自著です」などのたまわって、記者会見やサイン会を開いてみせる稚戯的な《タレント本》ならいざしらず、どこかの媒体に発表したノートの切れ端ごときエッセイをまとめただけの《専門》書や、原著の言語にはたしか半可通なはずの名ばかりの監修者を立てて、いかにも売れんかなの商売根性丸出しの訳書、宣伝の謳い文句ほどには内容のないベストセラー、さらにラベルを張り替えただけで新しさを銜う、おためごかしの新奇書…。売れない本の書き手としては、まことに苦虫を噛み潰しである。「呪われた部分」に一般経済の原則を求め、返す刀で詩を言葉の生贄と喝破したG・パタイユー流のアフォリズムをよしとすれば、なるほどこうした現象は消費文化の生態系をつとに象徴するものといえるだろう。だが、ありていに言って、まさにこれはシャルラタンのデカダンス。少なくとも、正統の対抗原理としてはかならず正統を演出する、シャルラタニズムの「異統」的諸論精神からはほど遠い。徒に売れ筋を追わず、未来に資する本作りを愚直に求める。この職人芸的ロマンティシズムを愛するのは、ひとり筆者のみではないはずだ。

*シャルラタン…近代を祝祭化した遍歴の山師たち

編集後記▶『情報エネルギー化社会』の邦訳出版は8年前(原書出版の翌年)に構想された。当時はまだITという用語も目新しく、著者の思想は一部ニューアカ世代に「近未来の世界像・世界観」として受容されていたに過ぎない▶しかし仮想現実の実像が私たちの日常世界の至る所でリアルな現実として立ち現れ始めた今日、本書で描かれたその現実についての議論が盛り上りをみせている▶人文書の出版は、ただ目新しい思想を誰よりも先に紹介すればよいというものではない。まして、広く受容されたネタをアイデア商品化して量販を狙えばよいものでもない▶人文書出版に必要な基本姿勢とは、目の前の安易なベストセラー作りの魅力に惑わされず、未来の現実を冷静に洞察し、思想の成熟のプロセスに敏感になって、思想が呼び起こす議論の空間的・時間的広がりを視野に収めることではないか。『情報エネルギー化社会』編集担当者